

臨床と研究と育児と

新潟大学医歯学総合病院 小児科 入月 浩美

私は医者になると心に決めたときから、漠然と小児科に進むことをイメージしていました。子どもが好きとか得意とか、あまり考えたことはありませんでしたが、いろいろな出会いを通じて、自然と子どもたちやご家族の笑顔を支える仕事がしたいと思うようになっていました。医学生時代や初期研修医時代に様々な診療科を経験し、小児領域以外にもそれぞれのやりがいを感じる事が度々ありましたが、やはり子どもを中心とした医療現場で感じる温かさに大きく惹かれ、進路を選択しました。

実際に小児科医として医療現場に立つようになってから、様々な経験を積ませていただきました。そして、日々の診療にやりがいを感じる一方、医療の限界も知るようになりました。治すことのできない病気を抱えた子どもたちを目の前にして、どうしたら良いのだろうと思い悩むことが増えました。

臨床医になってしばらくは忘れていましたが、私はもともと研究志向があり、医者になるかどうかはまだ決めていない頃にふと本屋で手に取った英文科学誌に訳も分からず心を奪われ、理解できるはずもないのに読もうとし、1ページも理解できずに終わったことがありました。今となっては何と無茶なことをしようとしたのだろうと思いますが、その頃は内容が全く理解できなくても、未知の領域に新たな発見を求める研究の世界があることを知り、胸の高鳴りを感じたことをよく覚えています。特に遺伝子研究分野に魅力を感じたのですが、遺伝子といえば小児疾患、という非常に短絡的な思い込みも、私が小児科に進んだ理由の一つです。

私は小児科のサブスペシャリティとして、先天代謝異常症を中心とした遺伝性疾患の診療に関わっています。数年前に他大学の研究施設に国内留学する機会に恵まれ、先天代謝異常症の基礎研究と臨床を幅広く学ぶことができました。ここで得た知識や技術、人脈は、その後も大きな財産となっています。今も、臨床と並行して遺伝性の希少疾患を対象とした基礎研究を続けています。臨床と研究のバランスをとるのはとても大変ですが、楽しいこともたくさんあります。また、実際の医療現場から得られるインスピレーションは研究を続ける上でなくてはならないものと感じています。ほんのわずかでも良いので、私の研究がいつか難病の子どもたちの役に立つことができたらと思っています。プライベートでは、3児の子育て真っただ中です。一番上の子を出産したのは約10年前ですが、最初の頃はとにかくがむしゃらで、小児科医といえども育児には全くの不慣れだったので、常にパンク寸前でした。私の場合は、幸いにも周囲の理解と協力がああり、何とか仕事を続けることができました。本当に感謝してもしきれません。時々、育児と仕事を両立してすごいと言われること

がありますが、実態は全く褒められたものではありません。子育ての悩みは尽きず、料理が下手と子どもたちに文句を言われ、洗濯と食器洗いと翌日の準備を夫に任せて子どもたちと寝落ちすることもしばしばです。育児でも家事でも、内科医の夫は良きパートナーです。それに、女性の社会進出が進んでいる現代では、自分たちの生活はごく普通の形だと思っています。ペースはとてもゆっくりですが、自分の目標に向かって一歩ずつ進んでいこうと思います。

<著者略歴> 入月 浩美 (にゅうつき ひろみ)

2008年、新潟大学医学部医学科卒業。
初期臨床研修を経て、2010年に新潟大学小児科に入局。
関連病院で小児科医としての臨床経験を積む。
2014年から2年間、埼玉医科大学ゲノム医学研究センターに国内留学。
2016年から新潟大学医歯学総合病院 小児科。
2020年から同院遺伝医療支援センター。現在に至る。
小学生の長女と次女、保育園の長男、夫との5人暮らし。

～男女共同参画推進委員会より～

「研究・教育における男女共同参画」

女性の大学進学率は平成期を通じて大きく上昇し、令和元年度には男性よりやや低いとはいえ約50%が4年制大学に進学する時代となりました。医学部入学者に占める女性の割合も約1/3と増えています。一方で教員に占める女性の割合は、教育段階が上がるほど、また上位の職になるほど低い傾向があります。

人は一生学び続ける必要があります。医師の場合は診療だけでなく、後進の教育、そして研究を通して自ら学んでいくことができます。研究分野における女性の割合は緩やかな上昇傾向にありますが、それでも令和元年で研究者の16.6%と、約1/2～1/3を女性研究者が占める欧米諸国に比べまだまだ低いレベルです。女性にとって出産・育児に追われる年代はちょうど医師あるいは研究者として成長する重要な時期と重なり、この時期のサポートが臨床医だけではなく、女性研究者の育成にも重要であると考えられます。

現在共働き世帯は全体の2/3に達し、結婚後も男性のみならず女性も働く時代になりました。それに伴い男性が家事・育児に、より積極的に参画してくれるようになってきました。この時期にパートナーの協力を得て女性も勉強や研究を続ける意欲と機会を持ち、そして学位の取得などさらなる到達点を目指すことは、女性個々のキャリアアップのためだけではなく、社会をより活性化する原動力になると考えられます。